



Title	6世紀の妃墓と大王墓
Author(s)	清家, 章
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 565-576
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

6 世紀の妃墓と大王墓

清 家 章

1. 研究略史

妃墓についてまとめた論考を書くのは白石太一郎である（白石 2005・2018 など）。現在宮内庁が管理・祭祀を行っている妃墓には佐紀古墳群などの中に 4～5 世紀の古墳も存在はする。白石は、それらのほとんどは伝承が不確かであり、実際の妃墓は継体大王の「皇后」とされる手白香王女の衾田墓からとする。手白香以降の妃墓は『延喜諸陵寮式』にも掲載がなされ、妃墓の取り扱いがこのころから大きく変化するという（白石 2018）。一瀬和夫は佐紀古墳群・馬見古墳群・西陵古墳群の一部に配偶者の被葬者の墓系譜の存在を考えるが（一瀬 2005）、白石の意見が適切であるとする。古墳時代中期には女性首長墓が極端に減少し（清家 1998・2005・2010）、男性初葬墳が主流を占める中で佐紀古墳群ほかにおける大型古墳が女性初葬墳になるとは考えにくいからだ。

応神五世孫という傍系かつ異端の大王である継体大王は、その即位の条件として仁賢大王の王女である手白香と婚姻した。そのことが手白香の存在を顕在化させた。継体以前の王権と継体のつながりを示すために手白香の墓が築かれたのであろう（清家 2006、白石 2018）。

白石は、手白香以降の妃墓についても考察を進め、それぞれの妃墓を比定していく（白石 2005・2018）。その考えに従うべきところは多いが、それでもなお 6 世紀の妃墓とその配偶者である大王墓について解き明かすべき課題は少なくない。後述するが、6 世紀の妃墓・大王墓は、妃墓が成立したことも含め、5 世紀までの大王墓と比較すれば、変化した点や特異と思われるところが多い。そうした変化や特異性が現れる背景を本稿は追求したい。なお、十河良和（2007・2011）と岸本直文（2011）は、河内大塚山古墳（羽曳野市・松原市）の被葬者を比定する際に、大王墓と妃墓について言及している。彼らの研究は、本稿の論点と深く関わるので自説を展開する際に適宜紹介する。

本題に入る前に、大王の妃と称号について述べておきたい。一人の大王には複数の妃が存在することが一般的である。『日本書紀』では、首座に立つ妃を画一的に「皇后」と記載する。『古事記』は「皇后」という記載は少なく、「太后」の語がやや多く用いられるものの、すべての大王記事に太后の記載があるわけではない。岸俊男は、「皇后」の呼称や制度は飛鳥浄御原令において整えられた可能性を示し（岸 1966）、吉村武彦も同様の意見を示す（吉村 2014）。皇

后以前の正妻的地位の妃には「太后」が用いられたとされるが、「太后制」が整えられるのは敏達期の6世紀末葉ころであるという（岸 1966）。吉村は「太后」は制度的に整えられたものでなく、尊称である可能性も指摘する（吉村 2014）。そうすると複数の妃から特定の正妻的地位の妃が選択されることは、6世紀末葉までは制度として存在しなかった可能性も考えられる。しかし、上述のように『延喜諸陵寮式』には、手白香王女以降の妃墓が掲載され、それに相当する古墳が実際に築造されている。手白香以降は、制度としては確立しておらずとも、正妻的地位の妃が存在し、それが重視されていたことは間違いない⁽¹⁾。その正妻的地位の妃とは、『日本書紀』によって「皇后」とされる女性のことと考える。

2. 6世紀における大王・妃とその墳墓

6世紀代の大王には武烈・継体・安閑・宣化・欽明・敏達・用明・崇峻の各大王がいる（図1）。ここでは継体から敏達までを取り扱う。武烈は伝説的な記載が多く、実在を疑問視されることがある。また敏達までが前方後円墳に埋葬されるが、それ以後の大王は基本的には方墳に埋葬され、埋葬スタイルが大きく異なる。用明以後は別に考察を進めるのが適切である。

（1）継体大王と手白香王女

『日本書紀』によれば継体大王の「皇后」は仁賢大王の娘・手白香王女である。

継体没年には異説があつて、527年・531年・534年説がある。『古事記』によれば継体墓は、「御陵者、三島之藍御陵也」、『日本書紀』には「藍野陵」とされる。『延喜諸陵寮式』には「三

島藍野陵」「在摂津国島上郡」とある。継体大王が埋葬された古墳は、高槻市今城塚古墳である可能性が高い（白石 1990 ほか）。手白香王女の墓は、『延喜諸陵寮式』には「衾田墓。手白髪皇女。在大和国山邊郡。」と記される。白石太一郎は、手白香王女の墓である衾田墓をオオヤマト古墳群内にある天理市西山塚古墳に比定している（白石 1986・1990）。継体墓＝今城塚古墳、手白香墓＝西山塚古墳については否定する見解はなく、定説化している。今城塚古墳は全長 190 m、西山塚古墳 114 mを測る。

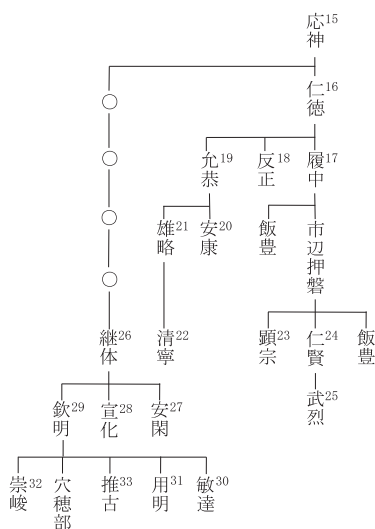


図1 記紀の皇統譜

（2）安閑大王と春日山田王女

『記紀』によれば継体と尾張連草香の娘・目子媛の

子である安閑が継体の跡を継ぐ。『日本書紀』では継体死去から安閑即位までに3年の空位があり、さらには継体の死に際し、『百済本記』の「日本天皇・及皇太子・皇子、俱崩薨」という不穏な記事を掲載することが知られている。

『古事記』には安閑妃に関する記事はなく、『日本書紀』には春日山田王女・紗手媛・香香有媛・物部木蓮子の4人の名があり、春日山田王女が「皇后」とされる。安閑の没年は『記紀』によれば535年である。

安閑墓は、『古事記』によれば「河内之古市高屋村」、『日本書紀』では「舊市高屋丘陵」とされる。『延喜諸陵寮式』には「古市高屋丘陵（中略）在河内国古市郡」とあり、三者の内容はおおむね一致している。異なっているのは、春日山田王女の埋葬である。『日本書紀』には「以皇后春日山田皇女及天皇妹神前皇女、合葬于是陵」とあって、安閑とその妹である神前王女とともに、春日山田王女は「舊市高屋丘陵」に埋葬されたことになっており、夫婦合葬の一例となる。その一方で、『延喜諸陵寮式』には春日山田王女は「古市高屋墓」に埋葬されたとあり、安閑とは別の墓が営まれたことになっている。

安閑墓に関しては、河内大塚山古墳安閑未完成墓説が複数の研究者から提出されている（十河 2007・2011、岸本直 2011、橋本 2010）。一方、河内大塚山古墳が安閑墓でないとする見解も強くある（安村 2016）。また、十河は、河内大塚山古墳は安閑未完成墓とし、ほんらい春日山田王女の墓として築かれた羽曳野市高屋築山古墳に安閑が合葬されたという興味深い案を提示した（十河 2007・2011）。これは上記『百済本記』記事に示される、いわゆる「辛亥の変」と呼ばれるような政変を背景にして、安閑が春日山田王女の墓である高屋築山古墳に埋葬されたとするものである。岸本もこれを支持する（岸本直 2011）。河内大塚山古墳の全長は335 m、高屋築山古墳の全長は122 mである。

（3）宣化大王と橘仲王女

『記紀』によれば安閑の跡は同母弟の宣化が継ぐ。宣化の妃に関しては『古事記』と『日本書紀』ではほぼ内容が同じで、橘仲王女と大河内稚子媛の二人が妃であり、『日本書紀』によれば橘仲王女が「皇后」と記載される。継体妃・手白香王女と橘仲王女はともに仁賢の娘で同母姉妹であり、安閑妃・春日山田王女とは異母姉妹である。宣化の没年は538年である。『日本書紀』によれば、宣化墓は身狭桃花鳥坂上陵であって、「以皇后橘皇女及其孺子合葬于是陵」とある。宣化は橘仲王女とその子供とともに葬られたというのである。

身狭の地には全長138 mの前方後円墳である樞原市鳥屋ミサンザイ古墳があり、他に6世紀前半に遡る適当な古墳がないことから、白石が述べるとおり、これが宣化墓の可能性が高い（白石 2018）。安閑と宣化は2代続けて「皇后」と合葬される珍しい事例なのである。

（４）欽明大王と石姫

『記紀』によれば宣化の跡を異母弟の欽明が継ぐことになっている。ただ、周知のとおり、安閑・宣化と欽明が対立して同時に即位していたという二朝並立説（喜田 1928、林屋 1952）が、現在なお有力な説として存在する。欽明の妃は、『古事記』に石比賣・小石比賣・糠子郎女・岐多斯比賣・小兄比賣とあり、『日本書紀』は石姫を皇后としつつ、そのほかに五妃（稚綾姫王女・日影王女・堅鹽媛・小姉君・糠子）がいるという。欽明の没年は『日本書紀』によれば 571 年である。『日本書紀』には、欽明墓は「檜隈坂合陵」とされ、さらに推古紀 20 年 2 月条に「改葬皇太夫人堅鹽媛於檜隈大陵」の記事があることはよく知られている。『延喜諸陵寮式』には欽明墓は「檜隈坂合陵」と記される。

欽明墓は橿原市五条野丸山古墳であることが古くから指摘され、高橋照彦の一連の論文から、その可能性は一段と高まった（高橋照 2004・2005・2016）。五条野丸山古墳の全長は、京都橘大学の調査によって 330 m との見解が示されている（一瀬・村岡 2012、一瀬・荒木 2013）。

五条野丸山古墳は河上邦彦によって未完成説が出されていることは注意を要する（河上 1995）。近年、総社市こうもり塚古墳の調査によって、五条野丸山古墳未完成説は確からしさを増している。こうもり塚古墳は全長 96 m の前方後円墳であり、五条野丸山古墳と墳丘形態が類似していることが指摘される（土生田 2012、金田編 2023）。こうもり塚古墳前方部は、後円部頂に匹敵する高さを持つことが発掘調査によって明らかにされたのである（金田編 2023）。こうもり塚古墳が五条野丸山古墳類型墳であるならば、ほんらい五条野丸山古墳の前方部は現在のように低平ではなく、こうもり塚古墳のように前方部を高く構築することを計画していたとの予測が成り立つ。前方部が低平で葺石や埴輪を持たないことは、本古墳が未完成であることを示している。

欽明「皇后」の石姫墓は、『延喜諸陵寮式』によれば磯長原墓であり、『日本書紀』には磯長陵とあって、その息子で大王の敏達と合葬される。石姫墓は太子町太子西山古墳に比定される（白石 2005）。太子西山古墳は全長 93m の前方後円墳である。

（５）敏達大王と廣姫・推古大王

欽明大王の後はその息子である敏達が即位する。敏達の妃について、『古事記』に豊御食炊屋比賣命・小熊子郎女・比呂比賣命・老女子郎女とあり、『日本書紀』では廣姫が「皇后」とされ、他に老女子夫人・菟名子夫人がいる。廣姫は早くに亡くなり、その後、豊御食炊屋姫尊（推古）が「皇后」となる（敏達紀 5 年春 3 月条）。

敏達没年は 585 年である。敏達の埋葬は死後しばらくたってからで、長い殯期間（5 年 8 ヶ月）があったことで知られる（和田 1973）。しかも、独自の古墳を築造することなく、母である石姫（欽明「皇后」）の磯長陵に埋葬されるという（崇峻紀 4 年夏 4 月条）。『延喜諸陵寮式』

には敏達墓は「河内磯長中尾陵」とされ、石姫墓について「磯長原墓 石姫皇女。在河内国石川郡。敏達天皇陵内。」とあり、陵名は異なるが石姫と敏達は同じ古墳に埋葬されたことが示唆されている。その古墳は上記の通り、太子西山古墳で良い（白石 2005、高橋照 2012）。

敏達「皇后」である廣姫の墳墓は不明であるが、推古は、その子・竹田王子の墓に埋葬されたと『日本書紀』にある。推古記には「御陵在大野岡上。後遷科長大陵也」とあって、推古墓は当初大野岡上にあったが、後に磯長に移されたことになっている。最初の墓が橿原市植山古墳であり、改葬後の墓は太子町山田高塚古墳であるとされることが多い（白石 2016 など）。

3. 6世紀における大王墓と妃墓の課題

前章で6世紀の大王墓と妃墓に関する文献資料を取り上げ、想定される古墳を示した。このように概観した上で、6世紀の大王墓を5世紀までの大王墓と比較すると、異なる要素あるいは疑問点が浮かび上がってくる。以下にその異なる要素と疑問点を示すことにしよう。

- ① 6世紀の大王は、方墳に埋葬される用明以降の大王を除くと、5人の大王が存在するが、全長 200 mを超える古墳が2基しか存在しない。全長 190 mで二重周溝を持つ今城塚古墳を加えても、前～中期の大王墓に相当する規模の古墳は3基しか存在しない。
- ② 河内大塚山古墳と五条野丸山古墳は未完成説がある。
- ③ 最有力の妃が独立した墳墓を築くことがある。
- ④ 安閑・宣化・欽明は妃の一人と合葬されるとの記録がある⁽²⁾。

このうち①については、6世紀は前方後円墳の規模が縮小する時期であると理解し、五条野丸山古墳をむしろ例外として取り扱うことが多い（都出 1992 など）。しかし、今城塚古墳を考慮に入れ、河内大塚山古墳が6世紀前～中葉に位置づけられるようになった現在では、大型前方後円墳の存在を例外として除外することは無理がある。王墓としての大型前方後円墳が少ない理由はさらに追究する必要がある。

③については、筆者（2006）や白石（2018）が述べるとおり、応神五世孫である継体の正統性を主張するため、旧大王家の王女である手白香墓を旧大王家の埋葬地である大和に築造したと考えられる。④に関わることもであるが、白石は続けて、安閑墓と宣化墓について、妃が大王墓に合葬されたというよりは、妃墓に安閑と宣化が合葬されたとの認識が「当時の人びとの意識に近い」と述べる（白石 2018）。卓見であるが、このことは再論する。いずれにしても、手白香墓が重要な基点となり、妃墓が独立して築造されるようになったのである（白石 2018）。

④については、白石以外にも関口裕子や筆者が考察を加えたことがある（関口 2001、清家 2006）。安閑と宣化は継体と地方豪族の娘である目子媛の子であり、その血統の弱さは隠しようがない。父・継体と同様に仁賢大王の娘を配偶者に迎えてその欠を補うとともに、旧大王

家出身の妃と合葬されることで王権継承者としての正当性を示すことが合葬の理由の一つとした。また、欽明と堅鹽媛の合葬については蘇我氏のデモンストレーションの結果とした。

これに対し、十河良和は、欽明墓における合葬については筆者らの見解を支持しながらも、安閑と宣化については埋葬された古墳の規模が小さいことから、妃との合葬がデモンストレーションとして効果があるかという疑問を呈した⁽³⁾。その上で安閑と宣化は、継体と同様に大王墓と妃墓をそれぞれ築造する予定であったところ、「辛亥の変」に示されるような政変によって大王墓は未完成に終わり、妃墓に合葬されたとしたのである。つまりは高屋築山古墳は春日山田王女、鳥屋ミサンザイ古墳は橘仲王女のためにももとは築造されたという見解を示したのである（十河 2007・2011）。岸本直文は少なくとも高屋築山古墳に関する十河の理解に対しては支持している（岸本直 2011）。十河と岸本の説には学ぶべき点は多く、後述のように筆者も自説に修正を加える。ただ、政変を背景に、安閑墓である河内大塚山古墳が未完成に終わって安閑が高屋築山古墳に埋葬されたことは理解できても、十河は宣化の未完成墓を明確に示すことができず課題を残している⁽⁴⁾。岸本も宣化墓を今後の課題としている。このことは、「辛亥の変」に示されるような政変のみで、安閑墓と宣化墓における大王と妃の合葬を理解することはできないことを示している。次章以下で論じたい。

4. 大王墓と妃墓の規模と環境変動

（1）大王墓と妃墓の規模

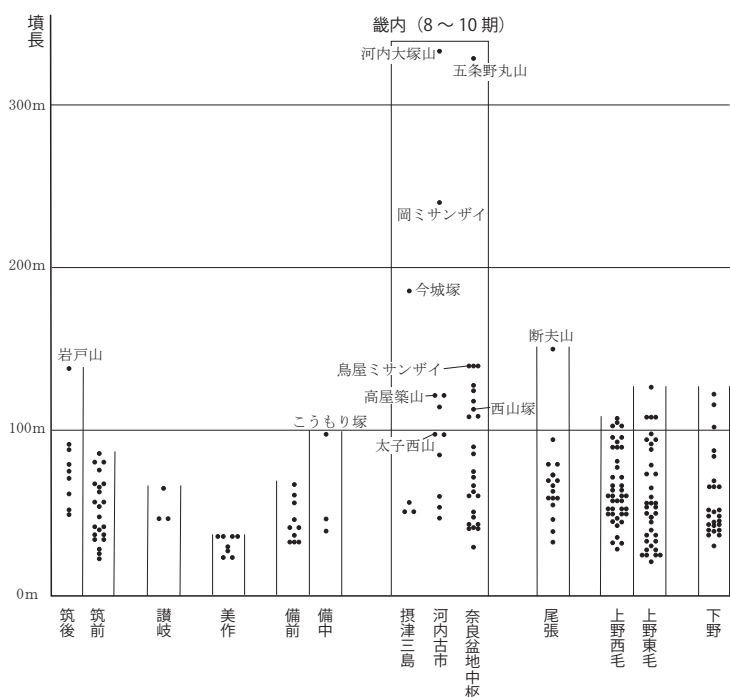
岸本直文は、大王墓と妃墓の規模を比較することにより、大王墓と「正妃」墓には格差があることを指摘した。このことをして高屋築山古墳がほんらいは春日山田王女のために用意された古墳であることの証左とする（岸本直 2011）。ただ、その一方で宣化墓である鳥屋ミサンザイ古墳の規模が小さいことに関する理由については判断を保留している。

この点を考察するため大王墓と妃墓の規模あらためて比較することにしよう。図2は岸本道昭作成による、『前方後円墳集成』編年9～10期に属する前方後円墳の規模を比較した図（岸本道 2004）に筆者が加筆したものである⁽⁵⁾。集成編年8期に遡る藤井寺市岡ミサンザイ古墳を除いて考えると、大王墓と目される河内大塚山古墳・五条野丸山古墳・今城塚は規模が抜きん出て大きい。一方、妃墓と考えられる西山塚古墳・太子西山古墳は、上記大型古墳に次ぐセカンドクラスに属することが見て取れる。その規模の古墳は、他地域では最上位に相当する。

安閑が埋葬されたとされる高屋築山古墳、宣化が埋葬されたとされる鳥屋ミサンザイ古墳もこのセカンドクラスに属する。大王が、地域首長と同等規模の古墳に埋葬されることが原則としてあり得るであろうか。確かに5世紀前葉には吉備に岡山市造山古墳が築かれ、畿内の大王墓と匹敵する古墳が畿外で築造された。それこそ造山古墳は例外中の例外であり、6世紀は各

地に屯倉が設置され、ヤマト政権の中央集権化が中期よりも進んでくるので、大王墓と地域首長墳の格差はより明確にされるべきであろう。

そのように考えると、西山塚古墳・高屋築山古墳・鳥屋ミサンザイ古墳・太子西山古墳は「皇后」墓であり、「皇后」墓には一定の格があって、セカンドクラスの墳丘規模がその格に相当すると考えた方が理解がしやすい。高橋照彦も 6 世紀の妃墓には一定の格式があることを指摘する（高橋



本図は岸本道 2004 の図をトレースの上、一部改変したものである。

太子西山古墳は古市古墳群内にないが、図の都合上、河内古市の箇所に加筆した。

図 2 後期前方後円墳の規模比較

照 2012)。すなわち、十河らが述べたようにもともとは高屋築山古墳は春日山田王女、鳥屋ミサンザイ古墳は橘仲王女、太子西山古墳は石姫のために築造が計画された古墳と考えられ、安閑・宣化と敏達らはほんらい別の古墳に埋葬される予定だったと考えた方がよい。安閑墓と宣化墓において夫婦別墓がもともと企図されていたならば、それは古墳時代前～中期以来の埋葬原理に適うことになり、この考えは理解がしやすい。

（2）安閑墓・宣化墓・欽明墓と環境変動

AD536 イベントと安閑墓・宣化墓 それでは安閑墓である河内大塚山古墳が未完成となり、宣化墓は築造すらされた形跡がなく、なぜそれぞれの妃の墓に埋葬されたのが課題となる。

筆者は海辺の洞窟・岩陰遺跡の整理を行う中で、MT15 型式期の終わりから TK10 型式期において、これらの遺跡に共通して空白期が存在していることを明らかにした（清家 2021）。また、高田健一も全国の海辺の遺跡について分析を進め、この時期の活動が低下していることを示した（高田健 2021）。筆者と高田は、いわゆる AD536 イベントを取り上げ、その影響が日本列島に及んで、海辺における人間活動が低下したことを主張したのであった。AD536 イベントとは、西暦 535 年に熱帯域で火山が大爆発を起こしたことにより、その影響で地球が寒冷化して世界

的不作や疫病の流行をもたらし、世界的な社会変動が引き起こされたとするもので、世界的に認められる環境イベントである。邦文であればデイヴィッド＝キーズの図書に詳しく（キーズ 2000）、日本でも新納泉が取り上げ、その影響を力説した（新納 2014）。AD536 イベントの影響について日本ではまだ否定的に見る風潮もあるが⁽⁶⁾、世界的に見れば、AD536 年イベントとさまざまな考古学的・歴史的現象を安易に結びつけることに警鐘をならすことはあっても、その存在そのものを否定することはもうないようである（Moreland 2019）。

AD536 年は宣化元年にあたり、キーズや新納も取り上げているとおり、日本書紀に「食者天下之本也。黄金萬貫、不可療飢。白玉千箱、何能救冷。」との詔があり、続いて凶年に備えて粳を蓄えていたことを述べた上で、筑紫国那津宮家へ諸国の粳を運ばせたとの記述がくる（宣化紀元年夏五月）。文献史では韓半島における軍事的緊張に伴う軍事政策上の理由で那津宮家への粳移動が行われたと考える向きが多い（仁藤 2009・2020）。その一方で、AD536 イベントを視野に入れて気候変動に対する民政的施策を兼ね備えるとの見解もある（生田 2007）。

筆者は、宣化墓が小型化し、かつ河内大塚山古墳が未完成である背景には、自然環境の極度の悪化が背景にあった可能性を指摘したのであった（清家 2021）。さらに酸素同位体比年輪年代法による古気候分析についても注目したい。中塚武は、6 世紀前半に降水量の急な変動があったことを指摘する（中塚 2015）。

6 世紀前半の環境悪化がもともとあった中で、AD536 イベントが発生し、河内大塚山古墳の完成と宣化墓の築造が見送られ、もともとは春日山田王女や橘仲王女のために計画されていた高屋築山古墳と鳥屋ミサンザイ古墳が安閑墓と宣化墓として利用されたと考えるのである。

AD536 イベントと五条野丸山古墳 五条野丸山古墳に未完成説があり（河上 1995）、こうもり塚古墳の調査からその可能性が高くなったことを述べた。欽明墓である五条野丸山古墳が未完成である理由も AD536 イベントに求められよう。筆者は、「二朝並列」説に示されるような安閑・宣化と欽明の同時即位があったと考え、安閑と欽明がその正統性を主張するように全長 300m を超える大型古墳をそれぞれが築造したと考えている（清家 2019・2020）。大王墓が寿墓であるとする、安閑墓と時期を大きく違えることなく欽明墓＝五条野丸山古墳が築造された可能性が考えられる。そうすると五条野丸山古墳が AD536 イベントの影響を受けて未完成となった可能性が十分に考えられよう。欽明の長期政権の中で、AD536 イベントの影響が落ち着いた時に、五条野丸山古墳の後円部を利用し横穴式石室が築造されたと考える⁽⁷⁾。欽明埋葬後に堅鹽媛が追葬され、夫婦合葬となるのは、これまでの筆者らの指摘のとおり蘇我氏台頭のデモンストレーションの結果である（関口 2001、清家 2006）。

敏達大王の合葬 敏達大王の合葬については、彼の死後、5 年 8 ヶ月という長い殯期間があったことに注意を払う必要がある。殯中には一種の政治的空白が生まれ王位継承において不安定になる期間があるとされる（和田 1973）。実際に敏達の弟である穴穂部が、敏達死後に即位を

要求し、殯宮にいた豊御食炊屋姫尊を犯そうとする事件がおきる。敏達の跡を継いだ用明も即位後1年8ヶ月で亡くなり、その後、丁未の乱が勃発した。丁未の乱後は崇峻が即位し、崇峻4年によりやく敏達は石姫墓に埋葬される。政治的不安定が続く状況で敏達墓築造が見送られた可能性が考えられる。

5. ま と め

内容が多岐にわたったので、時系列にして自説を示すことでまとめにしたい。

継体とその妃・手白香が亡くなり、継体は自らの基盤の一つである摂津の今城塚古墳に埋葬される。継体が傍系・異端の大王であることから手白香の存在が顕在化し、旧王権との繋がりを示すため大和に手白香の墓・西山塚古墳が築造された。これ以後、大王と正妻的地位の妃墓が別個に築造されることが基本となる。

安閑と欽明が政治的に対立し、2大王が同時に存在するに至り、その正統性をそれぞれが示すため、安閑墓としての河内大塚山古墳と欽明墓の五条野丸山古墳が築造され始める。その時間差は大きくはなかったと考えられる。それぞれの妃墓も築造が予定される。

しかし、6世紀前半はもともと天候が不順な中で、AD536 イベントが発生する。宣化元年に起こったこの環境イベントは、河内大塚山古墳・五条野丸山古墳の完成を妨げ、築造を停止した時期は不明ながらも結局のところ両古墳は未完成に終わったのであろう。同じく AD536 イベントにより宣化墓の築造も断念するに至ったのではないかと考える。その結果、もともとは春日山田王女と橘仲王女のために計画されていた、より小規模な高屋築山古墳と鳥屋ミサンザイ古墳が安閑墓と宣化墓として利用され、それぞれ夫婦合葬に至る。

欽明は長期政権を維持したため、AD536 イベントの影響が落ち着いた時に五条野丸山古墳が利用され、日本最大の横穴式石室を構築し埋葬された。欽明妃・石姫は、原則通り欽明と別に墓を築き太子西山古墳に埋葬されるに至る。欽明の子・敏達は、その死後長い殯期間を経て母・石姫墓に埋葬されるのである。

本稿は基盤研究 (S)20H05634 の成果の一部である。

註

- (1) 荒木敏夫は、継体から天武までの「皇后」と記された「キサキ」を取り上げ、新大王の即位に際して「キサキ」の中から一人の太后が立后された述べる（荒木 2006）。
- (2) 中期と後期の大王墓で異なる点として、後期の大王墓造営地が摂津・河内・大和と移り変わることも特徴と言えよう。歴代大王の中で継体のみ摂津に王墓が築造されるが、その王子である安閑墓は河内、宣化墓と欽明墓は大和に王墓が築かれている。大王墓の造営地移動の背景にも、安閑・

宣化と欽明の対立が関わると考えるが、紙数の都合上ここでは問わないこととした。

- (3) 高橋照彦も、別の側面から安閑墓と宣化墓における妃との合葬を政治的デモンストレーションとする筆者らの説に疑義を呈している（高橋照 2007）。高橋は、韓半島から影響をうけた夫婦合葬の浸透を安閑・宣化・欽明の合葬にみる。
- (4) 五条野丸山古墳はもともと宣化墓として築造されたが未完成となり、欽明がそれを再利用した可能性を十河は示している（十河 2011）。
- (5) ただし、岸本道昭（2004）の図には、もともと畿内のみ 8 期の前方後円墳を含んでいるので注意が必要である。
- (6) たとえば第 25 回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウムにおける辻秀人の発言（日高ほか 2020）。
- (7) 河上邦彦は、五条野丸山古墳の下から 1・2 段目と 3 段目では築造時期が異なるという推測を示している。本稿の見解と通じるところがあり、参考となる意見である（河上 1995）。

参考文献

【日文】

- 荒木敏夫 2006『日本古代王権の研究』吉川弘文館、東京（とくに pp. 220-252）
- 生田敦司 2007「気候変動データと『日本書紀』の記載」『気候適応史プロジェクト成果報告書』2 総合地球環境研究所、京都：pp. 43-49
- 一瀬和夫 2005『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館、東京（とくに pp. 168-199）
- 一瀬和夫・村岡瑞穂 2012「第 7 章 橿原丸山古墳墳丘模型製作資料」『京都橘大学 文化財調査報告 2011』京都橘大学文学部、京都：pp. 37-40
- 一瀬和夫・荒木瀬奈 2013「第 3 章 橿原丸山古墳測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 文化財調査報告 2012』京都橘大学文学部、京都：pp. 6-15
- 金田善敬（編）2023『史跡こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財調査報告 266 岡山県教育委員会、岡山
- 河上邦彦 1995「見瀬丸山古墳の墳丘と石室」『後・終末期古墳の研究』雄山閣出版、東京：pp. 290-306
- 岸 俊男 1966「光明立後の史的意義—古代における皇后の地位—」『日本古代政治史研究』塙書房、東京：pp. 213-255
- キーズ デイヴィッド（畔上司訳）2000『西暦 535 年の大噴火 人類滅亡の危機をどう切り抜けたか』文藝春秋、東京
- 喜田貞吉 1928「継体天皇以下三天皇皇位継承に関する疑問」『歴史地理』第 52 巻第 1 号（1981『国史と仏教史』喜田貞吉著作集第 3 巻 平凡社、東京に再録）
- 岸本道昭 2004「後期前方後円墳の時代」『古墳時代の政治構造—前方後円墳からのアプローチ』青木書店、東京：pp. 273-294
- 岸本直文 2011「河内大塚山古墳の基礎的検討」『ヒストリア』第 228 号 大阪歴史学会、大阪：

pp. 2-26

白石太一郎 1986「後期古墳の成立と展開」岸俊男（編）『王権をめぐる戦い』日本の古代第6巻
中央公論社、東京：pp. 209-254

白石太一郎 1990「古墳の被葬者はわかるのだろうか」『争点日本の歴史』第2巻 古代Ⅰ 新人物
往来社、東京：pp. 237-251

白石太一郎 2005「磯長谷古墳群の提起する問題」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』9（「磯長谷
古墳群の大王墓—敏達・石姫合葬墓の問題を中心に—」と改題して2007『近畿の古墳と古代史』
学生社、東京：pp. 151-169に掲載）

白石太一郎 2016「二つの推古陵—植山古墳と山田高塚古墳の提起する問題」『大阪府立近つ飛鳥博
物館館報』19（「植山古墳と山田高塚古墳—二つの推古陵—」と改題して2018『古墳の被葬者を推
理する』中央公論社、東京：pp. 159-200に掲載）

白石太一郎 2018「西殿塚古墳と西山塚古墳」『古墳の被葬者を推理する』中央公論社、東京：
pp. 105-133

清家 章 1998「女性首長と軍事権」『待兼山論叢』第32号 大阪大学文学部、大阪：pp. 25-47

清家 章 2002「近畿古墳時代の埋葬原理」『考古学研究』49巻第1号 考古学研究会、岡山：pp. 59-78

清家 章 2005「女性首長出現の背景」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学友の会、大阪：pp. 411-432

清家 章 2006「勝福寺古墳の埋葬施設と継体大王関連記事にみる古墳時代後期の埋葬原理」『川西
市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会、兵庫：pp. 297-308

清家 章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会、大阪

清家 章 2019「古墳時代における王墓の巨大化とその終焉」福永伸哉・上田直弥篇『日本古墳研究
リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』大阪大学大学院文学研究科、大阪：
pp. 19-32

清家 章 2020「古墳時代における王墓の巨大化と終焉—社会の変化とモニュメント—」松木武彦ほ
か（編）『日本の古墳はなぜ巨大なのか』吉川弘文館、東京：pp. 194-214

清家 章 2021「磯間岩陰遺跡の非畿内性と広域性」清家章（編）『磯間岩陰遺跡の研究』分析・考
察編 田辺市教育委員会・科学研究費磯間岩陰遺跡研究班、和歌山・岡山：pp. 221-234

関口裕子 2001「日本古代における夫婦合葬の一般的不在—一六世紀前半から九世紀初頭を中心に—」『清
泉女子大学人文科学研究紀要』22号（関口2004『日本古代家族史の研究』下巻 塙書房、東京：
pp. 966-1021に改訂の上収録）

十河良和 2007「日置荘西窯系埴輪と河内大塚山古墳」『埴輪論叢』第6号 埴輪検討会：pp. 63-82

十河良和 2011「日置荘西町窯系円筒埴輪と河内大塚山古墳—安閑未完成陵説をめぐって—」『ヒス
トリア』第228号 大阪歴史学会、大阪：pp. 27-51

高田健一 2021「古墳時代中期～後期における海浜部の埋葬と環境」清家章（編）『磯間岩陰遺跡の研究』
分析・考察編 田辺市教育委員会・科学研究費磯間岩陰遺跡研究班、和歌山・岡山：pp. 209-219

高橋照彦 2004「畿内最後的大型前方後円墳に関する一試論—見瀬丸山古墳と欽明陵古墳の被葬者—」
『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学、大阪：pp. 67-100

- 高橋照彦 2005 「欽明陵と檜隈陵—大王最後の前方後円墳—」『待兼山考古学論集』—都出比呂志先生退任記念— 大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 731-754
- 高橋照彦 2007 「六・七世紀の大王陵における合葬について—摂津・勝福寺古墳の位置付けをめぐって—」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』真陽社、京都：pp. 465-487
- 高橋照彦 2012 「欽明墓と敏達陵を考える」白石太一郎（編）『天皇陵古墳を考える』学生社、東京：pp. 219-272
- 高橋照彦 2016 「欽明陵の比定に関する補論—檜隈邑の復元を通して—」『塚口義信博士古稀記念日本古代学論叢』和泉書院、大阪：pp. 149-158
- 都出比呂志 1992 「墳丘の型式」『古墳時代の研究』第7巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造 雄山閣、東京：pp. 15-38
- 中塚 武 2015 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』第62巻2号 考古学研究会、岡山：pp. 17-30
- 新納 泉 2014 「6世紀前半の環境変動を考える」『考古学研究』60巻4号 考古学研究会、岡山：pp. 73-84
- 仁藤敦史 2009 「古代王権と『後期ミヤケ』」『国立歴史民俗博物館研究報告』152集、千葉：pp. 79-104
- 仁藤敦史 2020 「六世紀の環境変動と王権構造の変化」第25回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会（編）『第25回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム後期の中の変革—536年イベントにみる気候変動との関わり発表要旨集』、宮城：pp. 1-9
- 橋本達也 2010 「樋野ヶ池窯と河内大塚山古墳」『比較考古学の新地平』同成社、東京：pp. 383-392
- 土生田純之 2012 「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会、愛知：pp. 329-341
- 林屋辰三郎 1952 「継体欽明朝内乱の史的分析」『立命館史学』88（林屋1955『古代国家の解体』東京大学出版会、東京：pp. 3-32に再録）
- 日高 慎ほか 2020 「第25回東北・関東前方後円墳研究会 総合討論の記録『後期の中の変革—536年イベントにみる気候変動との関わり』」『東北・関東前方後円墳研究連絡誌』第49号、宮城：pp. 1-14
- 安村俊史 2016 「河内大塚山古墳を考える」『塚口義信博士古稀記念日本古代学論叢』和泉書院、大阪：pp. 227-236
- 吉村武彦 2014 「日本古代の王・王妃称号と『大王・太后』」『明治大学人文科学研究所紀要』75（「古代の王・王妃称号と尊称」と改題し2023『日本古代国家形成史の研究』制度・文化・社会 岩波書店、東京：pp. 65-96に掲載）
- 和田 萃 1973 「殯の基礎的考察」森浩一（編）『論集 終末期古墳』塙書房、東京：pp. 285-385

【英文】

Moreland, John 2019 AD536-Back to Nature? *Acta Archaeologica*, Volume 89, Issue 1. <https://doi.org/10.1111/j.1600-0390.2018.12194.x>